

# 地図で見る世界の子どもたちのようす

「世界子供白書2004」発表

## “女の子も学校に行く”

このあたりまえのことをすこしでも早く!

### 学校へ通い、生きていく上でたいせつなことを学ぶ

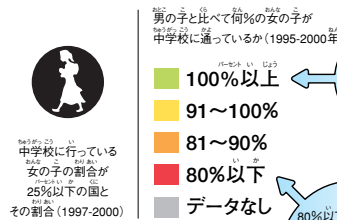
このことは、すべての子どもたちが、あたりまえにもっている“権利”です。

しかし、昨年の12月に発表された「世界子供白書2004」によると、今、世界では、まだ1億2,100万人の子どもたちが学校に通えず、そのうちの半分以上の6,500万人が女の子だといえます。小学校に入ることができても5年

生まで通いつづける割合は、男の子より女の子の方がずっと低くなっています。

地図を見てみましょう。中学校に通う男の子と女の子の割合を見ると、その差はもっとはつきりして、世界では、女の子の方が教育を受けるチャンスがずっと少なくなっていることがわかります。

#### 中学校に行っている女の子はどれくらい?



©UNICEF/91-C67-15/Shelley Rolles



©UNICEF/Somalia-06/Giacomo Pirozzi

#### どうしてなのでしょう?

その理由のひとつには、世界の多くの社会に根深くのこっている男女の差別や男女の役割を分ける伝統的な考え方があります。女の子は早く結婚して家の仕事をするもの、女の子には学校の勉強など役に立たない...などなど。

貧しさも原因です。きょうだいすべてを学校に通わせるお金がなければ、男の子が優先されることが多くなります。多くの女の子が家族の生活のためにお金をかせぎに出ています。

女の子が通いやすい学校がなかったり、学校が遠すぎるという理由もあります。学校に女子トイレがなかったり、学校で女の子が差別を受けたりすることもあります。学校が遠く、通学が危険だと、親は心配して女の子を学校へ行かせません。

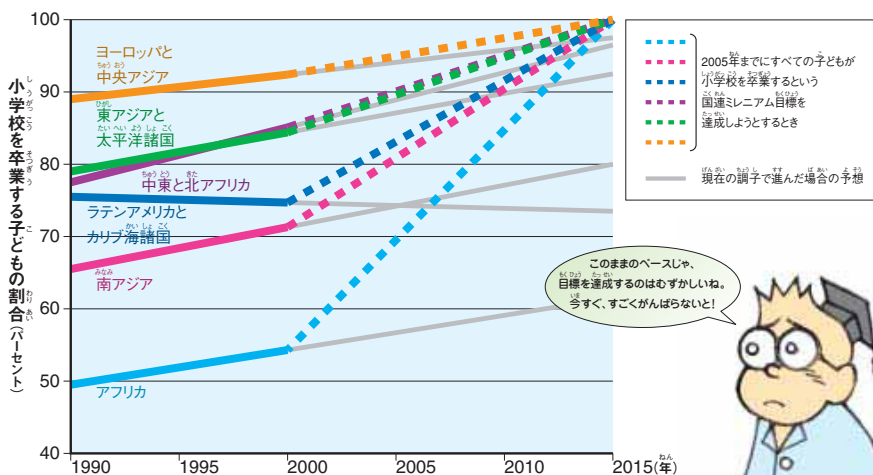
#### 解決できる!!

でも、こうしたことの多くは、世界の人びとが、本気で、すべての子どもたちを学校に通わせようとするれば、解決できるはず。

女の子が学校に通えるようになり、自分の人生を自分で決めることができるようになれば、大きなよい変化がもたらされることは、すでに証明されています。教育を受けた女性の子どもは健康に育ち、学校にも通います。HIV/エイズなどの病気から身を守り、より生活を豊かにすることができます。国の経済の発展にもつながっているのです。

女の子が学校に通えるようになるということは、男の子も学校に通いやすい環境ができるということです。教育はたんなる“よいこと”ではありません。子どもの“権利”です。だから、どの国も、どの人も、この問題に真剣に取りくまなければならないと白書はうたえています。

### 小学校を卒業する子どもの割合の変化と予想 (1990~2015年)



### コラム 1 夢は先生!

アワティフは、村に新しい学校ができると聞いた日のことを忘れられません。

「家にだれかがやってきて、この家で学校に行っていない子どもはだれ?って聞いたわ。おかあさんが、私の名前を言うの聞いたわ。すごくわくわくしたわ」

エジプトの農村、ベニ・シャラン村でくらすアワティフはまだ8歳でしたが、毎日、小麦畑で背中が痛くなるまで仕事を手伝い、家に帰るとおかあさんの仕事を手伝う、そのくりかえしをしてきた。エジプトでは女の子が学校に通っている割合が低く家の仕事を手伝っていることが多いです。村の商人のナイムさんが、土地と建物を学校にしようとして学校ができ、ことになり、村の女の子も学校に通わせようとなったとき、父さんや村の男の人たちは「女が何のために勉強するんだ」と

### コラム 3 カラテ・ガールは自信満々

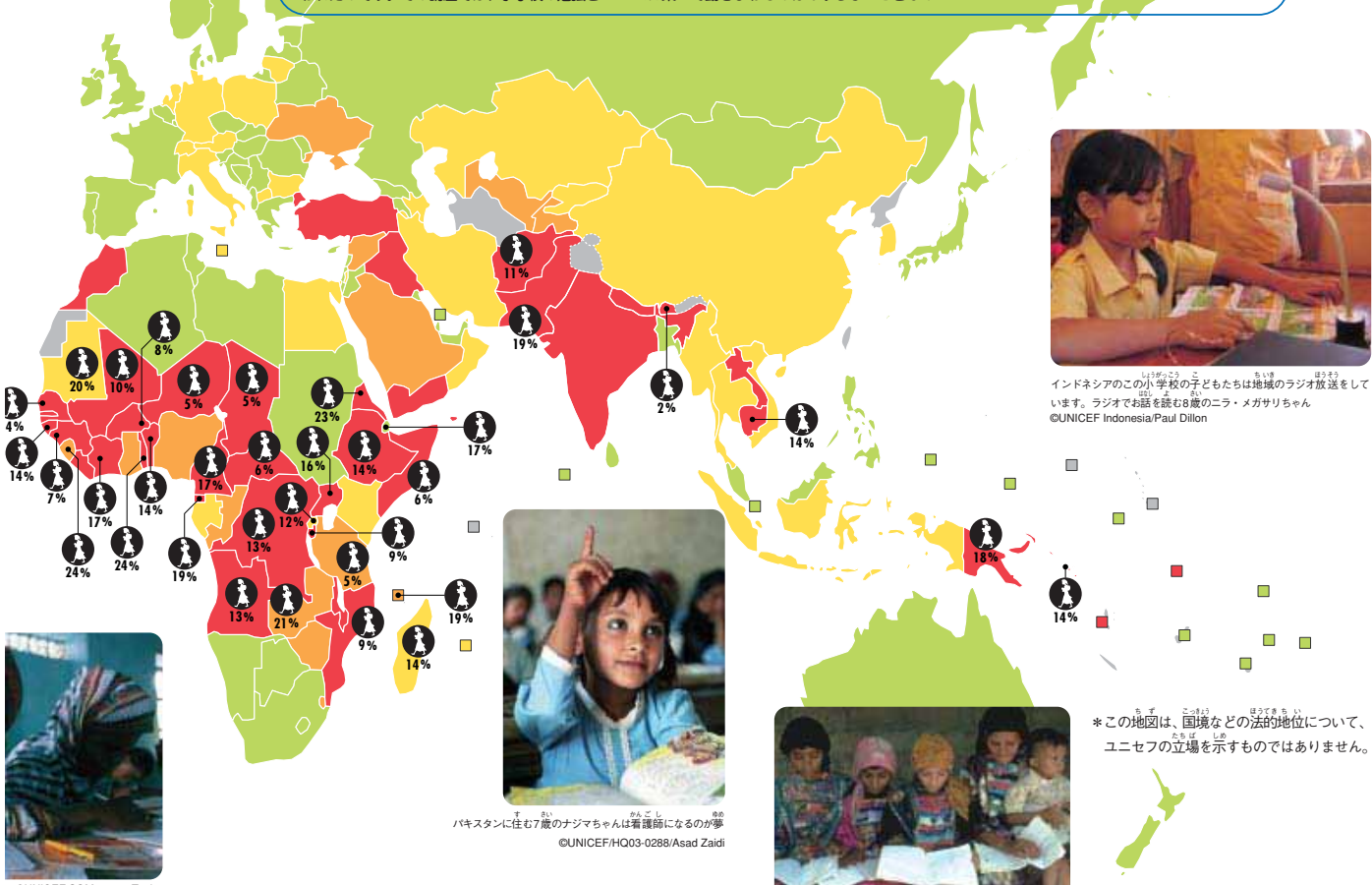
インドのビハール州に暮らすラリータは、インドではもっとも差別を受けることの多いカーストの出身です。「前は、やることといえば、草刈りやまき拾い、そうじや料理、それだけだったわ。でも、いまでは4カ所のセンターで40人の女の子に空手を教えているのよ」

ラリータは、学校に行くチャンスのない9～15歳の女の子と学校に通ったことのない女性のためにひらかれていた読み書き学校に通っていました。熱心に勉強するラリータは、ある日、ラリータのような女の子のために、合宿しながら行われる8カ月間の講座に参加しないかと誘われたのです。その講座では、小学校の勉強と

生活に必要な知識が教えられ、場合によっては中学校に進むこともできるといいます。ラリータは、**「も」**もなく参加したいと答えました。でも、ラリータのお父さんは強く反対しました。ラリータは、そこでは衛生のことも学べるから、わたしたちを汚いとさげすむ人たちを見返すことができる、とお父さんを説得し、ようやく講座に出ることができるようになりました。

講座で、小学校5年生までの勉強と空手を学んだラリータは、今では、自信に満ちています。空手を教えるにひとりバスに乗って移動します。このあたりでは、女の人がひとりで、それもバスに乗って動きまわるのはめずらしいことな

です。バスの中でいやがらせを受けたときも、空手のおかげで大丈夫だったわ、と笑います。4人の兄たちは、今でもラリータが空手を教えることに反対していますが、今ではお父さんがラリータの味方をしてくれました。「空手を習いはじめた女の子たちは、最初はこわいと言うの。でもだんだん慣れてきて、私みたいに強くなりたいと言うわ。そんなときはとてもうれしい」



インドネシアのこの小学校の子どもたちは地域のラジオ放送をしています。ラジオでお話を聴む8歳のニラ・メガサリちゃん ©UNICEF Indonesia/Paul Dillon



パキスタンに住む7歳のナジマちゃんは看護師になるのが夢 ©UNICEF/HQ03-0288/Asad Zaidi



©UNICEF/HQ91-0241/Nicole Toutourji

\*この地図は、国境などの法的地位について、ユニセフの立場を示すものではありません。



©UNICEF/SOM02-030/Taylor

を アワティフたちが学校に通うことをよいとは思いませんでした。でもナイームさんが、「男だったら自分で何とかできることも、女はそうじゃない。うまく人生をおくるためには女の子に教育がひつようなんだ」と言うのを聞くと、だんだん子どもたちを学校に通わせるようになりました。それから8年。今では教室も3つに増え、教育を受けた子が村を豊かにしてくれると、みんなは考えています。

2001年、アワティフはエジプトの子どもの代表として、ウガンダでひらかれた子どもたちの国際会議に出席しました。「学校に通っていなければ、こんなチャンスはなかったわ」と話すアワティフは、将来、先生になって自分が学んだことを他の子どもたちに伝えたい、と目をかがやかせています。



### コラム 2 さよなら授業料!

ケニアの首都ナイロビ。貧しい人びとがくらすキベラ地区にあるアヤニー小学校の1年生の教室はおおさわぎです。35人用の教室に70人以上の子どもたちがひしめています。シルビアは、その中でじっと先生の言うことを聞こうと目も上げずじまいです。

10歳のシルビアは、ついこの前まで学校には通っていませんでした。学校は授業料がかかり、その上、教科書代、制服代などの費用までかかるので、貧しいシルビアの家では、とうていそれをまかなうことはできなかったのです。

しかし、すてきなニュースがとびこんできました。2003年から小学校がすべて無料になるのです。小学校には、これまで学校に通えなかった子どもたち

がおしかけました。なんと、ケニア全体で130万人の子どもたちが新しく1年生になったのです。ケニア政府やユニセフは、急いで教材や学校の備品をそろえました。先生をふやすための研修もはじまりました。急にたくさんの子どもが学校にやってきましたので、それを受け入れるために最初の1年は大変でしたが、これからはだいじょうぶ。4年生のセレスティナは「教材が買えなくて、そのせいで教室を追い出されるんじゃないかと心配だったの。でも、ユニセフが支援したノートやえんぴつを受け取って、本当にほっとした。自分の祈りが届いたんだ、と思ったわ」と話しました。

